

令和2年5月8日

未来への扉 5

校長 平野 雅仁

今日は、1日の始まり、旅立ちの第一歩となる日本橋にスポットをあててみます。皆さんは、江戸時代の浮世絵 歌川広重の東海道五十三次之内「朝之景」を知っていますか？知らないという人は、学校だよりの左上にある絵や校舎内2階の廊下に飾ってある卒業制作を思い浮かべてください。



擬宝珠（ぎぼし）
をもっていた橋
は、江戸市中で
は、日本橋、京橋、
新橋のみです。

それでは、問題です。

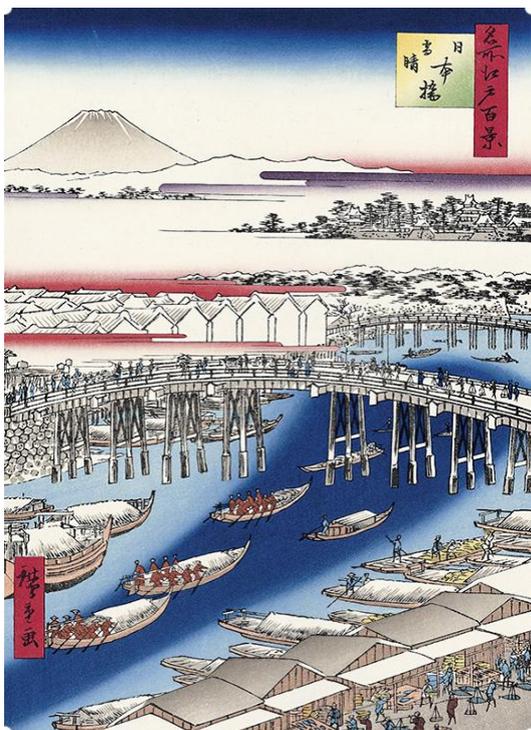
1. この絵を見ている私は、どこに（場所）立っているのでしょうか？
2. 時刻は、何時ごろでしょうか？
3. どんな様子を描いているのでしょうか？

場面をじっくり観察していると、正面の空が赤く曙（あけぼの）色に染まってきます。太陽が東の空から昇ってくる方向、そして、時刻です。参勤交代の大名行列が京都に出立するのは午前3時・4時ごろ、民謡『お江戸日本橋』にも「お江戸日本橋七つ立ち初上がり」とあります。そうすると、東に向かって、立っている私は、南側、銀座側において、三越方面を見ている。火の見やぐらの立つあたりがコレド室町でしょうか。中央には、はさみ箱を担ぎ、毛槍（けやり・やくの毛）を持った槍もち奴（やっこ）を先頭に行列が進んでいきます。江戸市中は、将軍様と御三家以外には、手を休める必要がなかったので、手前の棒手振り（ぼてふり）の人たちも忙しそうに働いています。ちょうど、橋の向かい側にあった魚河岸から新鮮な魚を仕入れてきて、これから売りに行くところでしょうか？

このように江戸から京都まで124里半（約500キロ）という長旅の振り出しは、ここ日本橋でした。夜間の町の治安を守るために封じていた木戸が左右に開かれると、家々の向こうの空を染める朝焼けとともに今まさに大名行列の先頭が橋を渡ってきま

す。左手に慌ただしくいくのは、魚河岸の朝市の買い出しをすませた魚屋さんたち。右手で戯れる二匹の犬が空気を和ませ、清々しいなかにも朝の活気を帯びた「朝之景」は行き交う人々の息づかいがきこえてくるようです。

もう一枚、歌川広重の浮世絵を紹介します。 《名所江戸百景 日本橋雪晴》



フランスのパリが、60万人、イギリスのロンドンが、80万人と言われていた時代、江戸は、100万人を超えていました。まさに人と物とお金が集まる、「天下の台所」でした。

一日は日本橋から始まります。海産物を満載した船が魚河岸へと向かう早朝の風景です。日本橋の北辺は「江戸の台所」として最も活気にあふれた場所でした。明治以降は手狭になり、関東大震災後には、築地に移り、現在は、豊洲市場に引き継がれています。日本橋には、現在、魚河岸の記念碑が建っています。

この浮世絵には、「日本橋」と「江戸城」、そして、遠く「富士山」が描かれています。江戸の人たちは、この風景から人々の活気や元気、誇りとあこがれを抱いていたのだと思います。私たちが何だか、元気になってきませんか？

江戸時代に架橋されてから何度も何度も被災され、架け替えられています。その度に生まれ変わる日本橋は、本当にすごい橋ですね。

みなさんも外出の自粛制限が、解除されたら現在の日本橋にも行ってみたいと思いませんか？



日本の繁栄を 羽ばたく未来を 翼のある麒麟が見守っています。

写真は、中央区図書館・国会図書館より

明治5年(1872年)



明治44年(1911年)



大正7年(1918年)



昭和2年(1927年)



昭和37年(1962年)



昭和45年(1970年)

